ボクシング

新春特集

挑戦する子供たち 2017

好きなことに出会い、熱中し、努力を重ねる子供たち。そのひたむきな姿は、私たちに感動を与えてくれます。このまちで真剣に夢に向かう子供たちを紹介します。

日本一を決める王座決定戦 見事につかんだ優勝・準優勝

全日本UJボクシング王座決定戦　優勝・準優勝

北海道予選大会、東日本代表選考会をトーナメントで勝ち進んだ2人は東日本チャンピオンの座に就き、昨年8月に大阪市で行われた全日本UJボクシング王座決定戦で、西日本チャンピオンと対決した。

川上くんは小学生38kg級で和歌山県の選手と対戦。持ち味の攻めのボクシングで判定3対0で勝利し、日本一に。「レフェリーが僕の手を持って上げた瞬間は実感がなかったけど、メダルを掛けてもらって、うれしさが込み上げてきた」と振り返る。

齋藤くんは中学生36kg級で沖縄県の選手と対戦。普段の練習の成果を発揮できず3ラウンドでTKO（安全を考慮し、過度な打撃を受けた場合にレフェリーが勝敗を決める）負け。でも、持ち味の強いパンチで初出場ながら準優勝に輝いた。「精神面をさらに鍛えて、次は絶対日本一になれるように頑張る」と闘志を燃やす。

永山南中学校１年生
齋藤皓太（さいとう こうた）くん

父に勧められ、小学５年生からタキボクシングジムに通う。現在の目標は、国体とインターハイでの優勝

東栄小学校６年生
川上真生（かわかみ まさき）くん

ボクシングをする兄の姿に憧れて、５歳からタキボクシングジムに通う。将来の夢は消防士になること

スノーボード

憧れの選手と同じ舞台で金メダル

北海道スキー選手権大会 スノーボードハーフパイプ１位

豊岡小学校５年生 西（にし） 桃奈（ももな）さん

昨年２月のＪＯＣジュニアオリンピックカップ全国ジュニアスノーボード競技会でも２位を獲得。スノーボードの魅力を「飛んだり回ったり、普通できない体験ができること」と話す。チームフリーに所属

昨年2月に開催された北海道スキー選手権大会で金メダルを獲得し、「このメダルが一番の宝物」と目を輝かせる。この大会には、ソチ五輪で15歳にして銀メダルを獲得した憧れの平野歩夢（ひらの あゆむ）選手も出場していたからだ。「絶対に勝つ。誰よりも高い点数を取る」という気持ちで競技に挑んだ。小学3・4年生の部に出場した選手の中では、唯一難易度の高い回転技を取り入れ、金メダルに輝いた。

夏はスケートボードやトランポリンなどで体幹を鍛え、冬はハーフパイプができるゲレンデを求めて、遠軽町や札幌市に通う。今季の目標は「去年より高く飛んで、さらに難易度の高い技に挑戦したい」と話す。いずれは、オリンピックで金メダルを取ることが夢だ。

写真

青春真っただ中の爽やかさを表現

全国高等学校総合文化祭　写真部門 最優秀賞・文部科学大臣賞（１位）

旭川商業高校３年生 菅沼菜々（すがぬまなな）さん

同校写真部所属。写真部は創部20年で、今回は同部から杉浦朱乃（すぎうら あけの）さんも道内唯一の奨励賞に。菅沼さんは写真の魅力を「２度と撮れない瞬間を自分らしく表現できること」と話す

全国からの応募作品309点中の1位。菅沼さんは「信じられなかった」と驚く。受賞した作品「思い出の道」は、カメラを始めて間もない高校1年生のときの作品。高校生の青春がテーマで、撮影場所は学校近くの公園。空の青が映えるようにローアングルで、木や草の見せ方、地面の幅、雲や人の位置など構図にこだわり、何度もモデルの写真部の仲間に走ってもらった。審査では「青春真っただ中の若者らしさと、風を感じるすがすがしさは、まるで映画のワンシーンのようだ」と絶賛された。

写真部に入ってからは「普段から、カメラの目線で周囲を見るようになった」と笑う。高校を卒業しても、何気ない人々の笑顔や風景など、好きな写真を撮っていくつもりだ。

少林寺拳法

日頃の修錬が大きな舞台で花開いた

少林寺拳法全国大会　女子単独演武有段の部２位

旭川永嶺高校３年生
山本千尋さん

小学４年生のとき、特別授業で体験した少林寺拳法に憧れて稽古に通う。金剛禅総本山少林寺旭川南道院に所属。155㎝と小柄ながら、大会ではダイナミックな演武を心掛けている

少林寺拳法では最も権威のある大会で堂々の２位。昨年10月に大分県で行われた大会には、高校生から一般までの48選手が出場した。予選はトップで進んだが、決勝は道内の高校生に惜敗。「あと一歩の悔しさと、うれしい気持ちが入り乱れた」と話すように、全国２位は自己最高。７月に米国カリフォルニアで開催される世界大会出場も決定。34か国が出場するが「少林寺拳法は日本発祥なので優勝したい」ときっぱり。

「器用じゃないので、才能より努力で勝ち取ったと思う」と山本さんは話す。少林寺拳法から学んだ集中力や忍耐力、努力することは、山本さんの人としての土台になった。「少林寺拳法の基本は人づくり。いずれは指導者になりたい」と話す。

化学

化学を論理的に分かりやすく伝える

全国高等学校総合文化祭　自然科学部門
研究発表・化学部門優秀賞（２位）

旭川東高校３年生
後列左から**坂口梨菜**さん、**木澤真由**さん
前列左から**森　裕汰**さん、**浅野弘靖**さん

今回のテーマは同校化学部の先輩たちが取り組んできた内容を、さらに深く研究したもの。優秀賞は予想外だったため「学校名を呼ばれたときは驚いた」と声をそろえる

優秀賞を受賞した論文のタイトルは「銅板表面における酸化皮膜の分析」。論文の事前審査と当日のプレゼンテーションの合計点で順位が決まる。

論文作成には夏休みも毎日のように学校に集まり、データを集めたりグラフを作ったりし、専門的な言葉を使うなど細部にもこだわった。プレゼンテーションを担当したのは浅野さん。会場で聞いていた顧問の富田一茂教諭は「化学の発表はいかに論理的で説得力を持つかが大事だが、群を抜いて良かった」と賞賛する。自分で調べ、考え、まとめ、それを説明し伝える力が高く評価された。卒業後、４人はそれぞれの道を目指して進学する予定だが、この経験は将来の大きな支えになるだろう。

アルペンスキー

©連続写真MOPI

アクシデントにめげず果敢に攻めた栄冠

JOCジュニアオリンピックカップ
全国ジュニアスキー競技会２位

啓北中学校１年生 片山龍馬（かたやまりょうま）くん

５歳から旭川ジュニアアルペンチームに所属。ＪＯＣジュニアオリンピックカップ全国ジュニアスキー競技会兼全日本ジュニア選手権の回転競技で準優勝。昨シーズンは道内ポイントランキング１位

「優勝したかった」と悔しさをにじませる。昨年３月小学６年生で出場した同大会の回転競技。焦りから中盤でポールが顎に当たるアクシデントで大きく回ってしまい、タイムロスした。「最悪だった」と振り返るが、そこからスピードを上げて攻め、２位を勝ち取った。

スキーに関しては負けず嫌いで、夏には体幹を鍛えるトレーニングを行ったり、休日でもスキーの動画を見て研究したりするなど熱心だ。常に高い目標を持ち練習に励む片山くんの将来の夢は、ワールドカップに出場すること。「自信は勝つ経験から湧いてくる」と話す片山くん。アクシデントにもめげない強い精神と果敢な攻めが持ち味だ。

水泳

１つずつ目標をクリアしてメダルを獲得

全国中学校水泳競技大会　２種目で３位

永山中学校３年生 菊地未愛（きくち みちか）さん

水中での強いキック力とスピードが持ち味で、女子自由形400mと800mで全国３位。昨年３月にはシンガポール遠征メンバーに選出された。スポーツアカデミーシーナに所属。お菓子作りが趣味

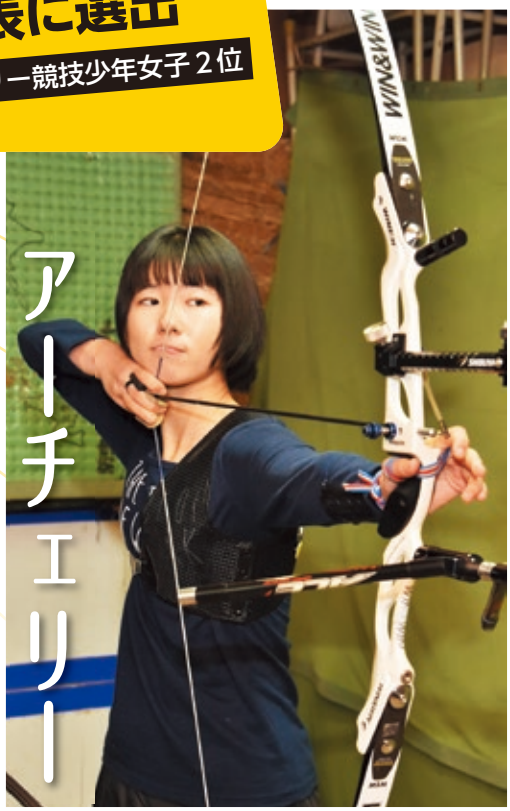
４歳から水泳を始め、５歳で大会に出場。育成クラスに選ばれたが、年上の子供と一緒の練習では「なぜ、自分にはできないのだろう」と涙が出ることもあった。でも、頑張れば上のクラスに進むことができるのが、喜びになっていった。

中学生になるとき、１年生で全国大会出場、２年生で全国決勝進出、３年生でメダル獲得という目標を立てた。それら全てを達成して、とうとう３年生の昨年８月、全国大会の２種目で銅メダルを獲得し、２日間続けて表彰台に立った。水泳の面白さは「結果を出せたとき」とアスリート魂を見せる一方で、将来の夢は「ディズニーランドの中でパン屋さんをやりたい」と無邪気に話す。

アーチェリー

国体で２位に輝き U-20日本代表に選出

国民体育大会　アーチェリー競技少年女子２位



旭川北高校２年生
中村美優（なかむらみゆ）さん

同校アーチェリー部所属。同部は、これまで３人の国体優勝者を出している強豪校。将来は「高校教師になり、アーチェリーも指導したい」と話す

初出場となった全国の舞台で2位に輝いた。70m離れた的に72射を打つ。1位とは3点の僅差だった。アーチェリーでは常に僅差が逆転につながる可能性があるが、「入賞も無理だと思っていたので、2位には驚いた」と話す。

中学校ではバドミントン部、高校に入って矢を射る姿に魅了されてアーチェリー部に。「アーチェリーは自分との戦い。気持ちが揺らぐとすぐに得点に反映される」と話す。11月の選考会でU-20日本代表に選ばれ、3月のアジアカップバンコク大会への出場権を獲得。夏期は屋外の洋弓場で、冬期は総合体育館か部室で、近い的に射る。「冬の練習環境では不利かもしれないがベストを尽くしたい」と、世界の舞台への意欲を見せる。

野球

初舞台で強豪校と対決

文部科学大臣杯全日本少年春季軟式野球大会３位

東明中学校野球部

野球部は25人。昨年３月に静岡県で開催された同大会に出場した、左から安藤拓真（あんどうたくま）くん、米田諒清（よねたりょうせい）くん、鈴木（すずき）　諒（りょう）くん。卒業後はそれぞれ違う高校に進学し、野球を続ける

高校野球「春のセンバツ」に例えられる、中学球児憧れの大会。初出場ながら勝ち進み、3回戦で前年優勝の宮崎県門川中学校と対決。高熱を押して登板したエースの鈴木くんを支え、一丸となって向かった結果、安藤くんの安打で劇的なサヨナラ勝ち。日々の練習で身に付いた「声出し」で士気を高めた。準決勝の相手は強豪校の高知県明徳義塾中学校。40℃近くまで熱が上がった鈴木くんを欠いたこともあり、大差で敗れた。主将の米田くんは「明徳は体格・技術・迫力の全てが圧倒的で、全国大会という舞台のすごさを感じた」と話す。しかし堂々の3位。真摯な練習が導いた大舞台での経験は、部員の胸に深く刻まれ大きな力になった。

挫折や偶然の出会いが今の自分を育ててくれた

全日本高等学校パワーリフティング選手権大会２位

旭川南高校３年生
池田光咲（いけだ みさき）さん

昨年８月に埼玉県で開催された全日本高校パワーリフティング選手権大会女子63kg級で２位。ハワイに留学した経験もあって英語が得意。将来の夢は、海外で活躍する選手の、スポーツトレーナーになること

パワーリフティングの目的は、柔道のためだった。小学1年生で柔道を始め、強豪校の旭川南高校に進学。全国大会出場を目指したが腰痛などに悩まされて果たせず、筋力アップのためにパワーリフティングを始めた。そこで指導をした菅原一宣（すがわら かずのり）さんが、持ち上げる重量に着目して全日本への出場を勧め、いきなりの2位。大会で競技を始めると「あれは誰だ」とささやく声が聞こえた。「私はノーマークだったから驚かれたのかな」と笑う。今年の目標は、2月の全国大会で優勝して、ベラルーシで開催される世界大会に出場すること。パワーリフティングの魅力は「重い重量を持ち上げたときの達成感」と話す。大学に進み、柔道もパワーリフティングも続けるつもりだ。

家族のことを通して伝えたかったこと

障がい福祉ふれあい作文コンクール 厚生労働大臣賞

永山小学校５年生 小松愛来（こまつ あいら）さん

読書もスポーツも大好きで、興味のあることは何でも挑戦する。水泳、そろばん、スキー、テニスと色々なことに取り組んでいるが、今は、兄の頼我（らいが）さんの三味線と合奏する琴の練習が一番の楽しみ

作文のテーマは「障がいのある方とふれあって」。応募を勧めた母は「自分の家族のことを書いたらいいんじゃない。お母さんは、障害があることを恥ずかしいとは思っていないよ」と言った。家族は愛来さん以外、障害があり、父は耳が聞こえず、母と兄は筋肉や骨の病気で体が少し不自由だ。「大変だね」とか「かわいそうだね」という言葉が壁だと感じていたので、題は「かべのない社会へ」とした。「受賞は驚いた」と愛来さん。愛来さんの母は「この作文をきっかけに、互いを理解し合える関係を築くことができたという方もいます」と笑顔で話す。将来は「障害のある人にも平等に接することができる看護師になりたい」と話す。

フットサル

世界の舞台で戦うために

全日本少年フットサル大会　準優勝

エスピーダ旭川

エスピーダ旭川は、市内初の小学生のクラブチームとして平成23年に設立。サッカーの技術だけでなく、困難に負けず夢に向かう力を身に付けることをモットーに、指導している。写真は準優勝を果たした９人

櫻井　廉くん

渡辺健斗くん

伊藤梨宮くん

東京で昨年８月に開催された大会には、47都道府県の予選を通過した各チームと、北海道からさらに１チーム加えた48チームが参加。旭川からエスピーダ旭川の小学６年生８人と５年生１人の９人が参加した。勝ち進んできた強豪チームを破っての全国２位は快挙といえる。しかし選手たちは一様に「悔しかった。優勝したかった」と話す。

キャプテンの伊藤梨宮くんは「自信はあったのに、シュートの決定力が足りなかった」と分析する。副キャプテンの櫻井廉くんも「最後の最後まで戦い抜く力が足りなかった」と反省。ベストプレーヤー賞を受賞した渡辺健斗くんは「最後まで楽しんで優勝を手に入れたかった」と無念の表情だ。だが、随所で見事な連携を見せ、初出場で堂々の準優勝。

今年、中学生になる３人は、コンサドーレ旭川などのクラブチームに所属してサッカーを続ける。３人とも夢は国内外で活躍するサッカー選手だ。監督の中川鉄平さんは「旭川の子供たちに、全国や世界で活躍するという夢を夢で終わらせず、実現してほしい」と指導に熱が入る。

◎

今回紹介した子供たちの他にも、夢に向かって力いっぱい挑戦する子供たちが大勢います。

子供たちが夢を抱くことができ、夢に向かって歩んでいけるように、市ではこれからも子供たちの健やかな成長を支え、夢を応援できる環境づくりに取り組んでいきます。

【詳細】広報広聴課　☎25・5370